

## 八尾田中家蔵上方学芸家書簡

著者	山中 浩之
引用	上方文化研究センター研究年報. 2000, 1, p.81-104
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00005322">http://doi.org/10.24729/00005322</a>

## 八尾田中家蔵 上方学芸家書簡

山中 浩之

ここに紹介する書簡は八尾田中家に伝来所蔵されるものである。この上方学芸家書簡が同家に所蔵されていることは、医家としての田中家の成り立ちと展開に関係すると思われるので、はじめに以下簡単に同家のことについてのおきたい。

田中家は十八世紀中頃から現代に至るまで約二五〇年間、八尾において医家として存続展開してきた家である。八尾はかつて木棉の大集散地として栄えた在郷町として知られるが、享保期には大坂の懷徳堂や平野含翠堂と同様に、住民有志によって環山楼（伊藤東涯の命名）という学問の場が形成された所でもあった。

田中家のもと大和国三輪神社の神職で、近世初頭の戦乱の渦中、八尾に移住定着した家であると伝えられる。八尾定住後は農民として存続したが、その家で医業への転換をはかったのは祐庵元允（一七二八—一七八九）の代であった。元允は環山楼の人たちと交流をもち、町場の発展の中で医療需要の高まりを感じつつ医の形成を志したものと

思われる。

その子祐篤元緝（一七六七—一八二五）は京・大坂に遊学して多くの学者たちと交流を結んだ。元緝は少時環山楼の同志の一人燈口孤島に学んだのち、京に遊学して伊良子光顕・和田東郭に医学を学んだ。傍ら本草学にも親しんだようで十代後半には木村兼霞堂を訪れたりしている。さらに儒学については大坂混沌社の片山北海や尾藤二洲らについたことがうかがわれる。

この元緝によって田中家は医家としての確立をみた。元緝は医家弥性園を営んだが、その中心に蔵書の形成があった。文政六年版の『続浪華郷友録』に元緝は「読書を好み、ここをもって蔵書多し」と記されている。この蔵書の大半は現在に伝来し、約二〇〇冊を数えることができる。

もう一つ注目されるのは、この元緋によって祖先祭祀が仏式から儒教へと転換されたことである。寛政元年の父元允の死は儒葬で営まれ

た。位牌も墓石も儒教化され、仏壇は祠堂へと変わる。これは医家としての家のはじまりを父におき、自分が継承確立することをはっきり示す行為であった。儒医としての精神的確立を示すものである。この後、元資（一八〇〇〜一八五九）の代になると懷徳堂との関係が強くなるとともに、幕末には頼三樹三郎や藤本鉄石など尊攘派の人々とも交わりをもった。「在村の儒医」から「草莽の医家」への変化を感じさせる。近代に入ってから西洋医学の修得がなされて漢方医から洋医への転換が行われ、地域医療の中心的存在として現代に至っている。なおその間も、儒教が「家の宗教」であったことに変わりはない。（詳しくは拙稿「在村医家の形成と儒教―八尾田中元緝を中心に―」『大阪の歴史と文化』和泉書院一九九四）

さてここにその一部を紹介する書簡は元緝・元資の代に収集されたものと思われる。収集といっても、いわゆる好事家的なものではなく、今のべたような自分たちの学問的伝統を確かめるといふ意味をもって、意識的に選択して入手されたとみられるものばかりである。古義堂・懷徳堂・混沌社そして医学・本草学関係の人々の書簡である。これによって一八世紀初頭から一九世紀に至る上方学芸の展開をたどるような性格をもっている。以下、各書簡ごとに翻字を掲げ、多少の注を付す。なお一部には写真を併載した。

(一) 伊藤仁斎書簡（中江岷山宛）

尚々御深志之段

源藏方にて手簡令拜見、

思召入辱存候、源藏方者御報申

然者拙者手前不自由之義

入間敷候、以上

御聞及被成、金子彦歩

芳惠御慈恵之段、不浅令

満足候、先日も御祝儀御

送被下候處、又々重畳之義

却而痛入存候、思召入之義ニ候

間、重畳申候も如何ニ存候

得とも申請置候、誠ニ御

深志之段難申謝候、心事

貴面之刻委曲可得

御意候、草々不宣

十二月廿五日

中江平八様 伊藤源佐

伊藤源佐は仁齋。寛永四年（一六二七）―宝永二年（一七〇五）。元禄期京都町衆として、朱子学を根本的に批判し、日本近世思想としての仁齋学を樹立。古義堂を営んだ。宛名の中江平八（明暦元年（一六五五）―享保十一年（一七二六））は、名一貫、字平八、号岷山、通称快安、仁齋門人。仁齋の門人簿には確認されないが、すでに紹介者としてしばしばみえる所から早期の門人であったといえる。大坂で学問活動を行った。著書に『四書弁論』十二卷・『理氣弁論』二卷などがある。書簡中「源蔵方」とあるのは、仁齋の長子伊藤東涯のこと。本書簡は謝金に対する礼状で「拙者手前不自由之義」とあるのがやや気にかかる程度でとくに記すべきことはない。年代も決め手を欠く。なお中江岷山は享保十一年（一七二六）七十一歳で大坂に歿したが、その墓碑は伊藤東涯撰文である（『大阪訪碑録』三八一頁）。なかに「都に造れば、必ず予の舎（古義堂）に寓し、唯、古道を倡明するをもつて、自ら任ず」とあり、最も古義学を忠実に継承する人であった。東涯も享保十二年の最初の平野含翠堂訪問の帰りには、天王寺一心寺の中江岷山の碑を拝している（『東涯家乗』）。

(二) 伊藤東涯書簡（土橋九郎右衛門宛）

尚、着岸之節、江田氏

寓へ罷越、其方御案内

可仕候、御同志中へも宜

十八日之書、今日相達

御心得被成可被下候、取込甚

致拝見候、梅天之節

執筆御恕察可被下候、

弥御堅固被成御凌候之

委細ハ江田氏迄申遣候、

旨珍重存候、爰許無恙

尤門生一兩輩同道可致と存候、

罷在候、然者其御地江

以上

遊歴可致之旨、先達而

申進候ニ付、縷々之御紙面

致承知候、天氣陰晴も

難斗候得共、先廿六日

書船ニ致シ參可申候、無

程緩々可得御意と存罷在候、

右可得御意、草々如此御座候、

恐惶謹言

伊藤元蔵

五月廿日

長胤

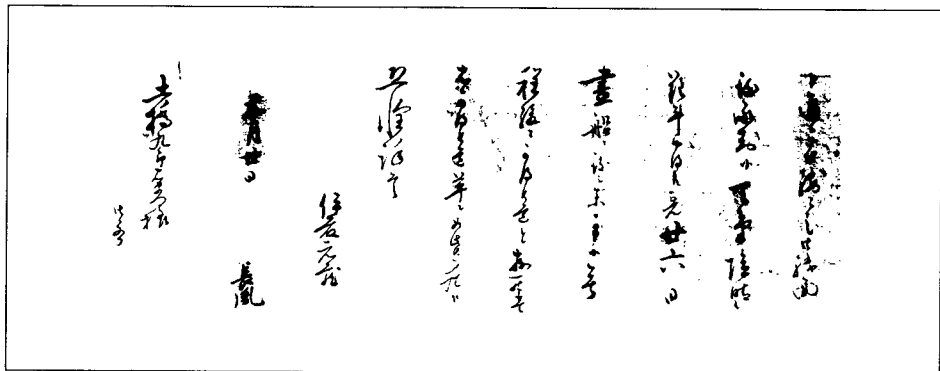
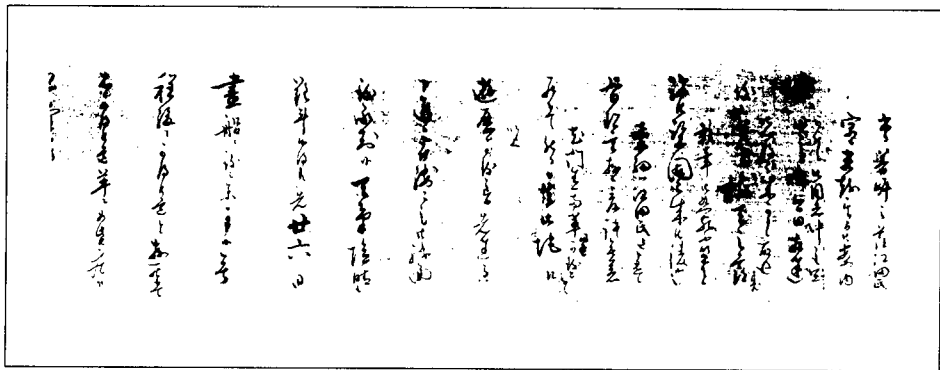
土橋九郎右衛門様

御右

伊藤元藏長胤はいうまでもなく伊藤東涯のこと。父仁斎の学を継承し京都古義堂の学を集大成して江戸の荻生徂徠と並び称せられた一代の碩学。寛文十年（一六七〇）生—元文元年（一七三六）歿

宛名の土橋九郎右衛門（名宗信、号節齋）は大坂平野郷の人。平野郷惣年寄で、西鶴らとも交友のあつた土橋宗静の孫であり、土橋友直とともに享保二年（一七一七）含翠堂設立の中心メンバー。土橋宗信の「含翠堂記」（享保一五年）は含翠堂設立の考えを最もよく示している（『平野含翠堂資料』所収）。九郎右衛門宗信は伊藤東涯の門人簿「初見帳」によれば、享保二年（一七一七）二月二二日、土橋四郎兵衛すなわち土橋友直の紹介で入門している（ビブリア九三号「伊藤東涯『初見帳』（三三）」。これは含翠堂設立の直前であった。

すなわち本書簡は、土橋九郎右衛門を中心とする含翠堂からの要請に応じて講義に出かけるその予定を報じたものである。さらに東涯筆「入撰誌」によつてそれが享保十八年（一七三三）に行われた二度目の含翠堂出講時のもので、しかも本書簡に記す通り、五月二十六日に出立していることが知られる（中村幸彦「伊藤東涯書簡集抄、附初度含



翠堂行・入撰誌」ビブリア二号)。書簡中に「門生一兩輩同道」とあるのは、河合周佐・福島若狭・原田誠藏という三人の塾生であった(『東涯家乗』第七冊。享保十八年条、天理図書館古義堂文庫蔵)。八軒屋に着いたのち「江田氏」の家に行ったが、「入撰誌」では「図書方へ落着」とあり、『家乗』では「江田清泉宅に着」とみえる。同じ人を指しており、東涯にとつて、大坂の親しい人であったが、この人についてはよくわからない。「内本町御祓すし西に入ル町」に住居があった(『家乗』)。翌二七日はまず懷徳堂を訪ね、中井髯庵をはじめ、多くの懷徳堂門下の人々と面会し(「大阪行日記名簿」古義堂文庫蔵)さらに大坂城代とその家中の人々へ挨拶に向いている。

翌二八日は平野へ下向し、含翠堂で講義が行われた。「里仁篇ノ本文、古義之意にて講習申候」(『家乗』)とある。父仁斎の名著『論語古義』に基づいて講義したのである。二九日はやはり仁斎の『童子問』を朝飯後、夕方と二回講習がなされた。六月朔日は誉田八幡、応神天皇陵、道明寺など含翠堂東南への「郊外遊行」に出かけ、二日は再び含翠堂で、朝飯後は『童子問』、夕方には『大学定本』が講じられた。仁斎は「大学非孔氏之遺書辨」を書いて『大学』という儒学テキストに疑問を抱き、「大学」を重視する朱子学批判を展開し古義堂用のテキストを作成していたのである。

東涯らは四日まで含翠堂に滞在し、その日午前中に「大学定本」を

講じたのち、出立して大坂に出、その後懷徳堂の中井髯庵としばしば会合を重ねて、七日、本町橋から夜舟で帰京した。

この享保十八年は、含翠堂が、その前年の享保大飢饉に際して、賑救事業を開始し、地域の自主的学習施設としてのあり方に新たな展開を画した時期であり、東涯の招請はそれに合わせた企画であったと思われる。そしてそれは後々にまで語りつがれ「撰津名所図会」(寛政一〇年刊)の一丁を飾ることにもなったのである。

(三) 伊藤東涯書簡(松浦市兵衛宛)

華札致拝見候、残暑之節愈

御堅固之旨珍重存候、然者為

中元之御祝儀金子百疋被贈惠、

幾久祝納致大慶候、尚期面上之

時御禮可申謝候、恐惶謹言

七月十一日 長胤

松浦市兵衛様 伊藤長胤

(異筆)「古筆入用物 遺申間敷候 酉冬改」

本書間は謝金に対する礼状でとくに記すべきことはない。松浦市兵衛は、東涯『初見帳』によれば、享保三年(二七一八)(欠)月七日入

門、京都の人である。

土橋九郎右衛門様

貴右

八六

(四) 伊藤蘭嶋書簡 (土橋九郎右衛門宛)

尚々乍略半紙如此

御座候、秋冷ニ相成

御持病指出不申哉

華書參致拜見候、

被用御心御保齋

向冷氣候、弥御堅固

被成候事專要

被成御凌候之旨珍重

奉存候以上

奉存候、然者今度紀藩へ

致出勤候段御聞及、御

賀被下、遠地被懸御心

忝奉存候、右御答可得

御意如此御座候、恐惶

謹言

伊藤才藏

九月六日

(花押)

伊藤才藏は、伊藤蘭嶋(名長堅、字才藏、号蘭嶋)、元禄七年(一六九四年)〜安永七年(二七七八年)、伊藤仁斎の第五子。東涯の弟であり、兄弟中でも俊才として知られた。宛名の土橋九郎右衛門は前掲(二)書簡参照。「紀藩へ出勤」とみえるが、蘭嶋が紀州藩の儒臣となつたのは享保一六年(一七三一)なので、本書簡もその年のものかと考えられる。なお「保齋」はひかえ目に生活することで、保養とほぼ同意。九郎右衛門は先述のようにすでに古義堂へ入門しており蘭嶋とも懇意であつたことがうかがわれる。

(五) 稲生若水書簡 (佐藤将監宛)

尚以弥御無事之由目出度奉存候、

爰元相替儀無御座候、青尊如何生

申候哉承度奉存候、異木奇草

正月十一日芳札相達辱致

御座候ハ、被仰聞可被下候、

拜見候、弥御無事御重歳之由

頼入奉存候、最前申入候通、

目出度奉存候、拙者無事越年仕候、

其御地ノ穀精草十茎ホド

然者海鹿之儀主治不申存候、

見事ニ御座候ヲ恵賜頼入奉存候、

其名ハ大明一統志等書ニモ

以上

見へ申候、久不得御意御物遠

御座候、弥御仁術御発行可

被成奉存候、手前彼是仕、御報

延引心外之至御座候、尚期後

音之時候、恐惶謹言

稲若水

二月十三日

宣義(花押)

佐藤將監様

稲生若水(明暦元年・一六五五〜正徳五年・一七一五、名宣義、字彰

信、通称正助、号若水)、儒学を木下順庵に、医学を父稲生恒軒と福

山徳潤(ともに大坂の人)に学び、のち本草学に志を立て、金沢藩主

前田綱紀に召抱えられた。『庶物類纂』千巻の著述に着手。『庶物類

纂』は中国の『本草綱目』を基本に典籍一七〇種余りにみえる動植物

の記述を体系的に集成総合化しようとした書物。ただし三六二巻まで完成した時点で若水は病歿した。日本の本草学・博物学の基礎をつくったとされる。

宛名の佐藤將監は三河の人。貞享四年(一六八七)二月二日兄とともに京古義堂を訪問し、伊藤仁齋に入門している(『諸生初見帳』第二冊)。稲生若水も仁齋と交流を持っていたようで、入門者の紹介をしばしば行っており、元禄十六年四月には若水が養子平八を伴い入門させてもいる。また若水の高弟でのち本草学を確立することになる松岡玄達も貞享三年二月に入門していた。元禄期上方の新たな学問興隆において古義堂を場としてそれぞれが交流をもっていた様子がうかがわれる。

本書簡は新年挨拶の礼状であるが、あわせて「海鹿」(ナメクジに似た巨大な海産軟体動物。うみしか、あめふらしともいう)の扱いと効用については未知だが『大明一統志』(明代の地誌九〇巻、一四六一年)などにみえていること、また「異木奇草」についての教示、そして将監の住地に産する「穀精草」(ほしくさ、あるいは水玉草、アカハナ科の多年草で、山野の陰地に産するという)を送ってほしいなど、いかにも本草学者らしい内容となっている。佐藤將監も本草に関心をもつ医家であつたらしい。なお「青尊」も本草の一種であるらしいが未詳。



(六) 三宅石庵書簡(土橋四郎兵衛宛)

先日御状忝候、其御許弥

御無事と奉存候、拙者義

四五日以前風引申候處、さめ

申候上ハ又引返し〜申候故、昨

今其処可参と存罷在候へとも、

得不及其義候、此銀子入之

状三輪氏方吉左迄参り候、

一昨日の事にて候が、我等持

参可申と請取置候處、右之

故にて候ニ付、被仰越候毛馬や

平兵へへむけてたのみ進し候、

其御許へ可参と存、昨日方

明日迄の講尺をも休日ニ

致し置候が、明後九日方

始申筈ニ申合置候間、風氣

よく罷成候とも一兩日ハ得

参ましく候、又西町へ宿

替申内、ふしんとも道屋方

申付候而、出来候ハ、引うつり

可申候、其内見合候て参可

申候、若得不参候ハ、来月

之事ニ致し可申候也、如何、

とかく又書状を以御左右

可申入候、此むね如幽様へ

御達可被下候、先程谷

沢新六尼崎方かへられ

被申候ハ、三輪氏あの方へ

下りてにて御座候由、左候ハ、

一兩日はかりニハ此方へも

立より可被申候やと存候

以上

五月七日

(端裏)

「土橋四郎兵衛

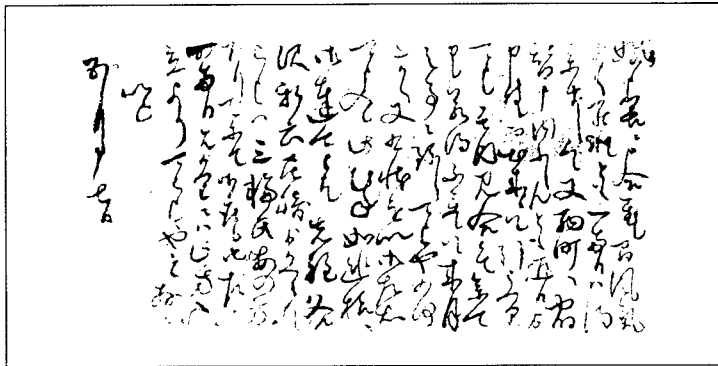
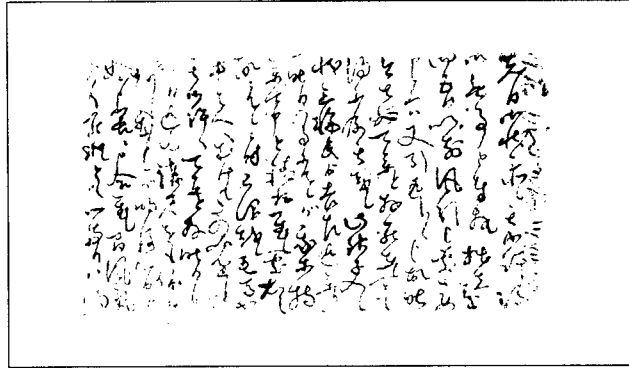
三宅石庵」

三宅石庵は享保九年(一七二四)五同志を中心とする大坂町人によ

つて設立された懷徳堂の初代学生。土橋四郎兵衛は享保二年(一七一

七)平野郷に含翠堂を設立した中心人物、土橋友直である。本書簡は、

石庵が平野へ講義に行く予定であったのが、風邪をひいて延引するこ



とになったことをのべる。なかに「銀子入之状、三輪氏方吉左迄参り候」とあり、また末尾近くに「三輪氏あの方へ下りて」とある三輪氏は三輪執斎とみてまちがいない。執斎は著名な陽明学者。京で活動していたが、享保元年江戸へ移住した。しかしその後もしばしば上方の諸友を訪れた。その代表が平野含翠堂であった。土橋友直はじめ執斎に親炙する人が多く執斎も石庵とともに含翠堂の精神的支えとなっていた。

この書簡が書かれたときも、執斎は、上方にいたが、執斎が、江戸移住後、友直が歿する享保十二年十月までの間で、上方を訪れたのは、享保五年三月〜五月、享保九年三月、享保十二年二月〜三月の三度である（『執斎和歌集』）。ただし享保九年三月は、大坂に妙知焼けと呼ばれる近世最大の大火のあった時であり、書簡中にそのことが全く触れられず、また日付も五月である点、やはりそのときの書簡ではないであろう。享保十二年も執斎は三月には江戸へ帰っているのではありません。とすれば、享保五年の五月七日付書簡とみるのが最も妥当であると考えられる。実際享保五年、執斎は「五月雨」の頃に、大坂の加藤伊左衛門（加藤信成の兄）に送られて、江戸へ下っている（同前）。「あの方」とは江戸のことであろう。

と、以上のように本書簡の年次を考えてきた。しかし、中に「如幽様へ御達可被下候」とあるのが、妙に気になった。「如幽様」は土橋

友直の養父三上如幽である。すなわち本書簡は三上如幽の存命中的ものでなければならぬ。そこで、一昨年、土橋家の菩提寺八尾服部川の神光寺調査をした際、拝した位牌の覚書、また「土橋氏・三上氏・三宅氏過去帳」（大阪大学土橋文庫）を検してみた。すると果して、如幽の歿したのは正徳三年（一七一三）九月三日、六〇歳であったことが明らかである。本書簡はそれ以前のものであることになる。当初、三宅石庵が平野へ講義に行くという書簡内容から、すでに含翠堂が設立された享保二年（一七一七）以降の書簡と思ひ込んでしまったことによる失考であった。

さてそうなることや事情は異なってくる。正徳三年以前、人々の関係はどのようであったのだろうか。三宅石庵が讃岐から戻り、大坂で講業活動をはじめるのは元禄十四年（一七〇一）頃からである。正徳三年八月には安土町二丁目に同志門下によって講舎多松堂が建てられるが、それまでは尼ヶ崎二丁目御霊筋に塾があった（『学問所建立記録』）。

一方、土橋友直は元禄一〇年（一六九七）十二歳のとき、貝塚三宅家から平野郷七名家の一人三上如幽の養子となり、やはり七名家の一つである土橋家に子がなかったので、あらたに同家を継いだ。その後、平野郷の町衆としての教養を培うべく京都に遊学し、儒学を伊藤仁齋に（元禄十六年六月十三日入門）、医を後藤良山に、そして歌学を河瀬菅雄に学んだ。その菅雄門に三輪執斎もいたのである。執斎ははじ

め中院通茂に和歌を学んだが、その歿後、菅雄についていたのである。友直は仁齋については「其学を信ぜず、唯先生の徳高きをたつとぶのみ」といい（享保七年、友直書留『平野含翠堂概要』所収）、仁齋よりは三輪執斎から最も大きな影響をうけた。「致良知の旨を唱えて吾愚もうをさとす故にうやうやく吾師として希賢（執斎）先生につかふ」（同上）とのべている。友直が京から平野に帰ったのは三輪執斎の「送土橋丈婦南撰序」（大阪大学蔵）に「元禄癸未（十六年）」とあるので、その頃であったのだろう。友直十八歳のときである。

平野へ帰って直ちに友直は儒教による郷民教育を行なおうとし、父如幽に頼み、自宅で月三回の講習をはじめた。これが曲折を経ながら享保二年の含翠堂設立へとつながって行くのである。その間、宝永三年（一七〇六）六月には、河瀬菅雄を招き、三上如幽・土橋九郎右衛門らと共に「奉納三百首和歌」を平野社に献じたりもしている。

それでは三宅石庵と土橋友直を中心とする平野郷の人々との関係はどのように形成されていったのか。この点今一つはつきりしないのであるが、あるいは加藤信成のような人が、有力な媒介をなしていたのではないかと推測される。というのも加藤信成は大坂の医家・薬種商であるが、早くからの執斎門人であるとともに、大坂では五井特軒・三宅石庵に儒学を学んでいた人であり、また鳥丸光栄門下として和歌をも深く嗜んだ（『聴玉集』）。そして土橋家は合薬商であり、信成は

もちろん、三宅石庵も儒業の傍ら業をあつかったことはよく知られている。しかもなお、皆ともに京の古医方家後藤良山に医を学んでいた。(享保三年「祝寿篇」)。このような関係は自然と彼らの間に結びつきを作り出していったと考えられる。なお宝永三年、三宅石庵の行なった論語講義を加藤信昌という人が筆記したものが残されるが、これは信成の近親の人であろう(懐徳堂文庫)。また宝永七年には、「加藤氏家譜」(加藤信成筆)の序文を石庵が撰している(中之島図書館蔵)。石庵はこのような中で三輪執斎や土橋友直とも親しい関係をもつようになっていったのであろう。正徳四年(一七一四)、石庵五十賀の際には執斎が賀歌を寄せているし(執斎和歌集)、享保元年(一七二六)の執斎の江戸移住に際しては石庵や平野の人々が送別の詩文を寄せている。

さて、本書簡にはもう一人、注意すべき人物がみえる。それは「銀子入之状、三輪氏方吉左迄参り候」という「吉左」である。これは道明寺屋吉左衛門、すなわち富永芳春のことであろう。道明寺屋はいうまでもなく、享保九年懐徳堂を設立することになる町人五同志の中心人物であり、また平野含翠堂の助力生員として有力な支援者でもあった。富永仲基の父としても知られよう。執斎から友直へ渡すよう依頼された「銀子入之状」とはおそらく、友直による講習活動への執斎からの援助金ではなからうか。なお書簡中「ふしん(普請)とも道

屋方申付候」とある「道屋」も道明寺屋を略したいい方のように思われる。

すなわち本書簡は宝永・正徳期前半、土橋友直が如幽とともに自宅で講習活動を行っていた時期、石庵に講義を要請したのに関わる書簡であり、あわせてそこには、懐徳堂はもちろん含翠堂も設立される以前の、大坂における自主的学問活動展開の動きが、三宅石庵・三輪執斎・土橋友直・富永芳春らによる親密な関係を介して形成されつつあったことが示されている。

なお、「毛馬や平兵衛」「谷沢新六」については不詳。また「西町へ宿替」とあるのはよくわからないが、正徳三年の安土町の多松堂のことではなさそうである。安土町を「西町」と表現するのは方角的に不自然である。むしろその前の「尼ヶ崎町二丁目御霊筋」の方がさうよぶにふさわしいようである。ともあれ本書簡は含翠堂や懐徳堂設立前すでに、石庵・執斎・友直・芳春らが親密な結びつきを形成していたことがよくわかれるものである。

なお神光寺調査および土橋家過去帖については村田隆志氏・坂上弘子氏の御厚配を賜わった。記してお礼申し上げます。また神光寺については『神光寺墓地墓碑銘―懐徳堂・含翠堂関係者―』が坂上弘子氏編・村田隆志氏解説によって刊行されているので参照されたい。(平成一〇年七月、坂上弘子氏発行。)

(七) 梁田蛻巖書簡(小林多門宛)

(前欠)  
節録仕遣候、若其二元

御覽も有間敷候哉と存、

抄出懸御目候、唐人韓柳之

外数多之才子驚人候、

泉州踞尾村ノ邑豪<sup>二</sup>

北村六三右衛門と申者、定<sup>而</sup>御聞

及と存候、此者向榮亭之

八詠、去冬<sup>方</sup>頼来、此間

出来申候而浄写遣候、中<sup>二</sup>

横山炭煙別<sup>而</sup>難題<sup>二</sup>御座候、

古今ノ詩文<sup>二</sup>炭煙之作

例見当り不申候、今度不思議<sup>二</sup>

蛻翁作り出し候、煙ノ字ヲ

不入して全篇影出之法ヲ

用候、御覽可被下候、信太千枝ノ

楠ハ六帖巫ノ歌に

和泉成信太の森の楠の千枝に

ワかれて物をこそ思へ

此和哥<sup>二</sup>本つき候、猶万々

它日可申承候、不悉

梁田才右衛門

邦彦

己巳八月七日

小林多門様

報酬

梁田蛻巖(一六七二〜一七五七)は名邦美、また邦彦、字景鸞、通称才右衛門。十八世紀前半、新井白石・服部南郭らと並び称せられた学者。とくに漢詩において高く評価される。室鳩巢、三宅観瀾らとも親しかった。

幕府儒官人見鶴山に学び才をあらわしたが、不羈磊落な文人性のためか、仕官も長く続かなかつたが、享保四年、四八歳になって明石藩に仕を得て、歿するまでそこで活躍した。清田儋叟・江村北海・柳沢淇園・中井甕庵・竹山、また古医方の確立者山脇東洋など上方の学者を育てる上でも功があつた。

本書簡は「己巳」すなわち寛延二年(一七四九)のもの。前欠とみられる上、宛名の小林多門についても未詳であるが、残存部分にやや興味をひく内容がみられる。それは泉州大島郡踞尾村の豪農として知られる北村家から、その邸宅の茶亭でもあろうか、向榮亭からの眺望



ず、それで、「蛻翁作り出し候」「影出之法」をもって創作したと詩人としての自負をのぞかせている。その八詠とは左の如くである。

寄題踞尾北村氏向榮亭八景

池上櫻花

野野花争発。一泓環白雲。穿林人影見。隔水鳥聲聞。  
臺樹霞相射。琴尊春自分。維レ舟依ニ夕蔭。煙月惹餘薰。

後園蟲聲

秋園多紳露。靜夜百蟲吟。雨絶テ堪レ支レ枕。風来可レ和レ琴。  
巴茅惹ニ花ノ路。孤客遠郊ノ心。却笑嬌兒女。篝燈處處ニ尋。

信太春烟

落落長松樹。千枝讓ニ豫章。林光含ニ宿雨。山瀟瀟ニ春陽。  
不レ論芥斤ノ入ルヲ。只聞花草ノ香。子規来ルコト幾日。一路歸トシテ蒼茫。

横山炭煙

隔レ山知レ炭久。仍作ニ岫雲ノ看。弧矢随レ風姿。絲綸隨樹寒。  
鳥銀応ニ斗。白玉想成レ團。日暮無ニ蹤跡。西霞一片残。

高志夕陽

白鶴盤何久。漁舟已施レ纜。平沙承ニ落照。疎竹間寒蘆。  
茲境宜ニ高士。使ニ人想ニ大湖。煙波秋色遠。倚レ樵独長吁。

鳳寺晚鐘

鳳寺春山夕。鏗然法響傳。花飛插ニ返景。林静度ニ深煙。  
鶴集香臺外。僧帰清廬邊。何人驚ニ大夢。暫此脱ニ鹿縁。

淡路残月

萬古神人蹟。靈区第一名。潮通ニ畿内ニ近。鳥入ニ林間ニ明。  
白月残鐘レ喚。翠嵐高旭レ瀟。天橋何処是。雲盡大空清。

葛城晴雪

東望葛城嶽。雪朝冠ニ衆峯。雲間抽ニ玉筍。日下映ニ青松。  
咫尺河泉ノ色。光輝僊釋ノ踪。山靈羞不鵬。雖レ夜尚修容。

〔蛻巖集〕後篇卷一

たしかに「横山炭煙」では「煙」の字を用いずに「影出」しているようである。また「信太春烟」の詩は、「古今和歌六帖」の「いづみなるしのだのりのくすのきのちへにわかれてものをこそ思へ」という歌から着想を得たという。ただしこれは六帖自体からではなく「夫木和歌集」巻二十二、雑部四にのる歌からであろう。（六帖では「くすのはの」となっている。）

なお蛻巖は泉州佐野の豪商文人として知られる唐金梅所（喜右衛門）の新居「垂裕堂」についても「唐金氏垂裕堂十二咏」（『蛻巖集』巻四）を詠んでいる。唐金氏もまた西鶴『永代蔵』の「浪風静に神通丸」で描かれる長者であった。梅所は新井白石・三宅観蘭・室鳩巢らとも一定の交流をもっていたがそれは蛻巖を介してであったろう。さらに梅所は宝永五年（一七一三）五月二〇日に、伊藤東涯に入門している。東涯は和歌浦へ遊ぶさい、梅所を訪れており、『梅所遺稿』などには東涯の序が付されてもいる。泉州の豪農豪商層が一八世紀前半、このような学芸関心と交流を有していたことは注目されることである。

(八) 祇園南海書簡(紀三井寺宛)

尚々昨日専蔵も

見へ申候、如推察此節不得

寸暇候由、其御方へ茂夫故

如貴論昨今ハ珍敷

御無音心外との御噂くれく

天氣御座候、弥御替無

二而御座候、以上

御座候由慶慰仕候、

随分吉原方到来之由ニて

新敷松茸一籠被懸

御意辱次第奉存候、

ことの外見事成ル義、

別而不浅致珍賞候、

且又何方之重之内被下、

是亦御芳情之至忝、

殊ニ勝手之者共不大方打寄

賞翫悦之義御座候、

誠にく遠方思召寄

千万く忝奉存候、心事

貴面御礼可申謝候、以上

九月廿四日

尚々此度ハ茸狩

延引千万く残念至極

御座候、乍然専蔵方賀慶之

品ハ本懐之儀ニ存候、老拙風氣も

いまに勝不申候而床褥ニ

罷在候仕合故、為養生ニハ

延引も一段奉存候、右之義ニ付

毎々御世話忝奉存候、以上

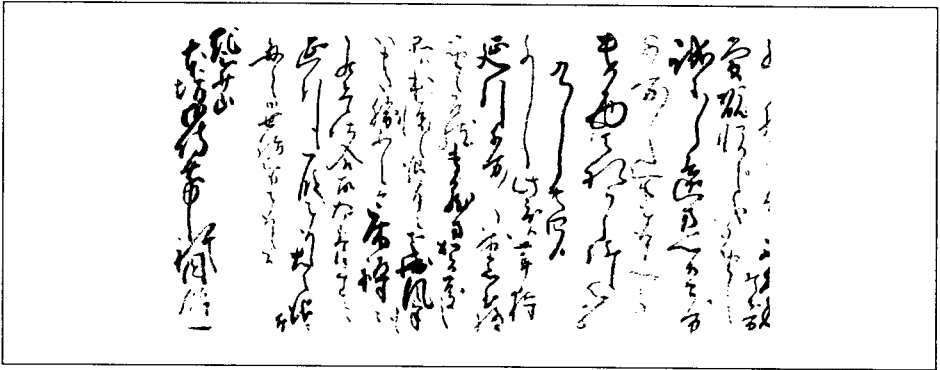
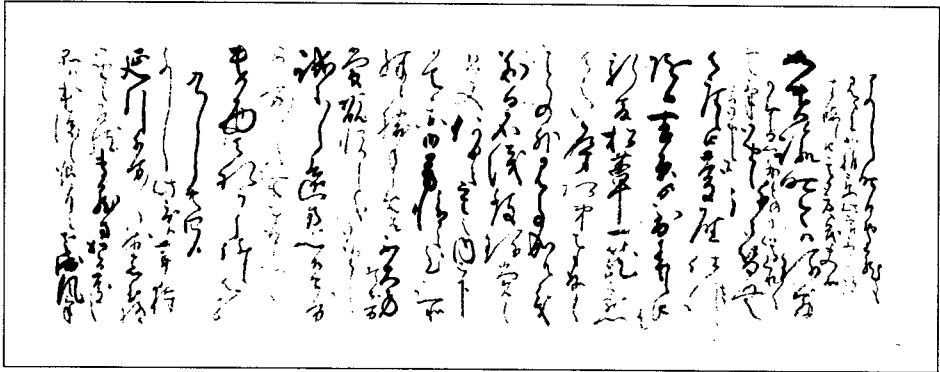
紀三井山

本坊御侍者中

祇園餘一

祇園南海。名瑜、字伯玉、汝浪、通称餘一、号南海、寛文六年(一六六六)く宝暦元年(一七五一)く。和歌山藩儒。木下順庵に学び新井白石・梁田蛻巖と詩才を並び称せられた。「放蕩無頼」と相まって文人精神を代表する人であり、詩書画一体としての文人画の創始者でもある。本書簡は紀三井寺に宛てたもので、内容は御覧の通り、松茸の礼である。専蔵については未詳、吉原は名草郡吉原村か。





(九) 宇野明霞書簡(僧正大和尚宛)

幸便御座候故申上候、冷氣  
 日到候、益御安康被成  
 御座珍重奉存候、小人病體  
 餘症ハ快御座候得共痛處  
 同然也、甚倦申候、御印章  
 成就仕候故奉上仕候、御名印  
 舊刻ハ古篆彙選之  
 鼎文也、亮字を御假ニ成候、  
 彼書ニ歸と歸とを別ニ  
 写、歸ニ縮文鼎文を加候へとも  
 出處不審、亮の篆文  
 諒なる事書ニ明ニ御座候故  
 今刻ニ諒を用候、凡當時  
 印刻多御座候得共得法ハ  
 稀ニ御座候、今刻ハ篆文  
 小人布置仕候而工人へ相授  
 此餘の御印も改刻被成候ハ、  
 可被命候、又篆文写候而  
 工人へ可相授候、餘事

後日可申上候、恐惶敬白

九月廿七日

僧正大和尚座下

宇野三平拜

宇野三平は宇野明霞。京都の人、名鼎、字士新、通称三平、号明霞、元禄十一年（一六九八）〜延享二年（一七四五）。はじめ徂徠学を奉じたが、のち折衷を主として独自の学を立てた。弟の士郎と並び平安の二字と称せられた。浪華混沌詩社の片山北海の師でもある。

宛名の「僧正大和尚」が誰かは特定できない。明霞は宇佐美瀧水・僧大潮に徂徠学を学んだが、その大潮（明和五、一七六六歿、九三歳、佐賀の人、江戸でも活動）か、あるいは僧大典であるかもしれない。大典（一七一九〜一八〇一）は、明霞に儒学を学びのち京相国寺住持、十八世紀上方詩文運動において重要な位置を占める。

書簡の内容は印章篆刻成就に関わって篆文鼎文のことなどをのべる。明霞の篆刻については知らないが、篆刻は文人に必須の技芸の一つと意識され、多くの人々が多少とも試みた。「古篆彙選」という書は中国書であろうと思われるが、明霞は古体派の篆刻へ志向していたらしく、それはこの後の高芙蓉・葛子琴・曾之唯らの古篆隆盛へとつながっていく動きの早いものといえるのかもしれない。

書便、  
 日、  
 終、  
 成、  
 在、  
 見、  
 彼、  
 出、  
 諒、  
 印、  
 行、  
 此、  
 の、  
 二、  
 後、  
 九、  
 僧、  
 宇、



江村傳左衛門は江村北海（京都の人、名緩、字君錫、通称傳左衛門、号北海、正徳三年（一七一三）→天明八年（一七六六）、福井藩儒伊藤竜洲の二男、青年期は明石の梁田蛻巖（前掲（七）書簡参照）に学び、のち江村家をついで丹後宮津の青山侯の文学となった。宝暦十三年（一七六三）、致仕して京城南に住んで、詩社賜杖堂を興し、大阪混沌詩社とも頻繁な交流をもって十八世紀上方学芸運動をリードした人である。『日本詩史』『日本詩選』の二書は、日本漢詩史の白眉であり、『授業編』は近世学習論として最も具体的である。

宛名の林伊兵衛は、京都書肆文錦堂、京都二條通柳馬場東入に店を開き、宝暦十二年（一七六二）→文化六年（一八〇九）まで開板が確認される板元。『近世崎人伝』正統・『閑田耕筆』『芸苑談』『秋苑日渉』などの文人随筆、『淇園文集』『葛原詩話』などの詩文、『生々堂医譚』『一角纂考』などの医学、本草関係など、十八世紀学芸文化の一翼を担う書肆であった。『浪華郷友録』や『平安人物志』など学芸家案内誌の出版にも参加し、学芸社会の形成にも一定の役割を果たした（井上和雄『増訂慶長以来書買集覧』・坂本宗子『享保以後板元別書籍目録』など）。江村北海は書物を通して当然親密な交渉をもったと思われる。

本書簡は林伊兵衛が北海へ借宅の世話をしたのに対し、先にすすめられていた方へ決めたことを連絡する内容であるが、そこにみえる

「室町四条下ル町」は明和五（一七六六）年版『平安人物志』の北海の住所として載る所である。したがって本書簡はこれより以前であろう。なお安永四（一七七五）年版以降は、「釜座通下立売下ル町」となっており、その後移居したことが知られる。また書簡中に「隣家武川幸順達而す、められ」とみえるが、武川幸順は京都の小児家医。さきの『平安人物志』には「室町四条下ル丁」とあり、まさしく「隣家」であった。なおこの武川幸順は、本居宣長が小児科医になるために学んだ医家でもある。宣長は宝暦二年（一七五二）上洛、儒者堀景山に入門したのち、同四年景山の歿後、景山門下の武川幸順に医学を学んでいる（宣長『在京日記』）。

なお「九月賀州へ参り候」と書簡中にあるが、この点は未詳。年次は明和期の前半かと思われるが特定できない。

(十一) 平沢旭山書簡（橋本貞元宛）

春色迫人候而舊遊のミ存出

申候事ニ御座候、近況如何、弥

御安好奉珍重候、先達而ハ御

篆刻被下、毎々御苦勞千萬

忝被存候、以尺一御礼可申上候

得共、いつも御返事なく候ゆへ

不及其義候、唯尺惠八拜

服不恐候、此度西スル人有之

候程、不腆不雅なる品ニ候へ共、

東都ノ名産ニ候ゆへ御慰ニ

進上仕候、御笑納可被下候、定而

渾社諸友時々御參會奉

察候、兼葭折々鷗鯉雅

來申候、千秋諸子御出

會之節宜御致聲可被下候、

奉頼候、它後急申上候奈

草々如此御座候、頓首拜

二月廿一日

平澤茂介

橋本貞元様

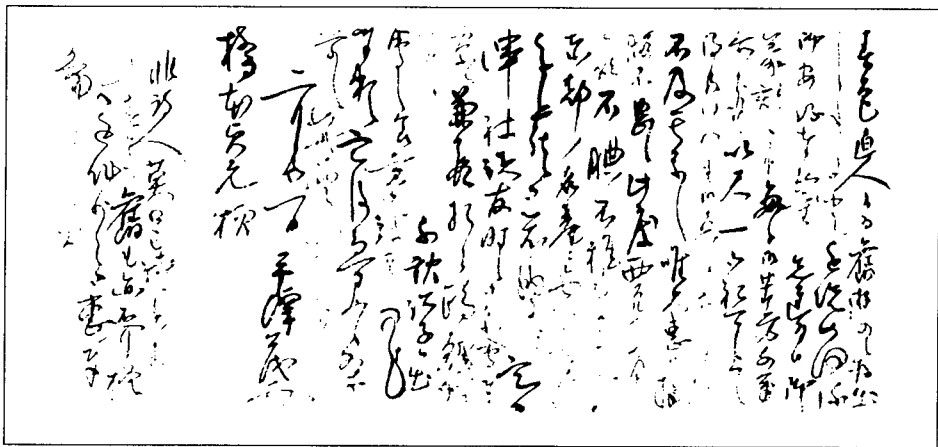
非詩人莫呈詩とは

申すとも舊も亦不可捨

とか近作少々御整奉

希候、以上

平沢茂介は平沢旭山（一七三三—一七九一）、名元愷、字悌候、通称茂



介、のち五助)。旭山は山城宇治の人。大坂で片山北海らと交わり、明和二年（一七六五）の混沌社設立に関わったことが知られる（多治比郁夫「平沢旭山と混沌詩社の成立前後」大阪府立図書館紀要七）。その後、江戸へ出て、明和五年（一七六八）六月二日、良野平助の紹介で林家塾（湯島聖堂）に入門を許され、「七月晦日昌平坂入塾」と『升堂記』（東京都立中央図書館）にみえる。昌平坂の学舎内に住居したらしい。明和六年十月廿二日仰高門講釈を仰付けられている。その後、史料編纂所本『升堂記』にはみえないが、都立本によると、安永三年七月一たん退塾し、同五年再入塾し、同八年三月朔日には員長役（学頭）にまでなっている。さて本書簡は、おそらくその間のものと思われる。宛名の橋本貞元は混沌社の詩人として著名な葛子琴（天明四・一七八四歿）である。子琴の特技であった篆刻を送られた札をのべるが、子琴からは「いつも御返事なく」といつているのは面白い。子琴はあまり手紙を書かなかつたらしい。そして「舊遊のみ存出」しというように、兼霞堂や頼千秋（春水）など「渾社」すなわち混沌社で交遊した人たちへの思いがのべられている。追書では詩人子琴に詩の批評を乞うている。旭山が茂介から五介（助）へと改称するのは、天明元年十月朔日であるので（『辛丑日録』『業餘稿叢』所収）、それよりは前の書簡である。

なお旭山は、その後また退塾したのち、天明七年七月に「再勤」、翌年七月に退役ののち、「寛政二年庚戌夏六月 破門」と『升堂記』

に記される。これは明らかに同年五月に出されたいわゆる異学の禁によるものであった。なお旭山には『漫遊文章』他の多くの著書があり、『辛丑日録』『遺光曆』などの日記が残される。

(一一) 尾藤三洲書簡（田中祐篤宛）

華簡奉讀、其後ハ絶而御音

信も不承候所、弥御平安被成御入、

欣慰之至ニ奉存候、此度菅生

東行ニ付、佳品 預御惠贈

感亦不少候、菅生事ハ折節

弊廬人少ク候ニ付、先ハ差置

申候、どふやら志もある様ニ見へ候

全ク賢契年来之御堤携（マ、）

ゆへと存候、猶遂々出精上達

致し候様ニ被存候事ニ候、明日書封

出し候様申候ニ付、鳥渡御答迄ニ

草々如此ニ候、老懶多事萬

御海容可被下候、頓首

四月廿九日

田中祐篤様 尾藤良佐

尾藤良佐は尾藤二洲（一七四五—一八一三）、伊予川之江の出身、若くして上方に来て、京の皆川淇園に一時就いたのち（『有斐齋受業門人帖』）、大坂の混沌社に加わり、片山北海、葛子琴、頼春水、また懷徳堂の人々と学問交流を重ねた。社友とともに河内や和泉にも出向、その地の在村青年たちの学芸を支援した。宛名の田中祐篤（元緝）もその一人で、二洲と唱和した詩や、二洲の詩箋が残されている（前掲拙稿参照）。二洲は寛政三年（一七九一）、聖堂儒者として幕府に登用され、昌平坂学問所設立へと至る幕府学政改革をになっていく。本書簡はすでに出府後のもので江戸から出されたものである。祐篤の知る者という若者を二洲の下へ遊学させようとしたのに対し受け入れの意向を伝えている。このような人とのつながりを介して昌平齋へ遊学する者が多かつたらしい。

（二三）柴野栗山書簡（尾藤二洲宛）

二白

私人人讚生柴田勘蔵ト

申者、品ニより来春ハ御

塾中へ御寄宿御頼申度

奉存候、未若輩未熟者ニ

御座候へ共何率御教育

可被下候哉、外ニ相頼候方も

無之、無據申試候、尚亦

勘蔵兄与治兵衛ト申者、則

此度罷下り以參御頼可申候

委曲之事ハ彼者へ御聞可被下候、

何卒相成候筋ニ御座候ハ、御領掌

被下候様ニ御頼申候、取込中

是□事も早々申収候、頓首

彦助

良助様

本書簡は本文・日付ともに欠いているが、この彦助は柴野栗山の通称とみてよいだろう。栗山はいうまでもなく、天明八年（一七八八）一月、林家以外の学者としてはじめて聖堂付儒者となった人。松平定信による寛政改革の一環としての聖堂改革のため、上方から学者が登用されることになるが、その一人目であった。宛名の良助は良佐すなわち寛政三年聖堂儒者として同僚となった尾藤二洲であろう。本書簡も栗山の出身地讃岐からの遊学生柴田勘蔵というものを二洲の家塾へ寄宿させてほしいとの依頼状である。なお二洲の役宅は聖堂敷地の一隅にあった。

(一四) 古賀精里書簡(尾藤二洲宛)

今日寒泉江御出被成候由、右

御支度御冗中難得貴

意候得共、足東山廿日ニ賀庭

之由ニ而高作催促致来候、

輻中之御閑絡索ニ被成可被下候

一、拟又高批忝即師用仕候

御禮旁草、申候

三月十八日

良佐様

弥助

弥助は古賀精里の通称、良佐は尾藤二洲である。

精里は佐賀藩士、はじめ陽明学を学び京に遊学して福井小車、西依成齊に朱子学を学んだあと、大坂に来て頼春水、尾藤二洲と交流し、朱子学復興グループを形成。天明元年(一七八一)、佐賀藩校弘道館教授となったのち、寛政八年(一七九六)、幕府儒官として登用され、栗山・二洲らとともに寛政期学政を担い、昌平黉の設立展開に尽力した。

書簡のはじめの「寒泉」は岡田寒泉のことであろうか。寒泉(清助)

は寛政元年(一七八九)儒職に登用され、柴野栗山(彦助)、尾藤二洲(良佐)と並んで「寛政の三博士」また「寛政の三助」ともよばれた人である。「足東山廿日ニ賀庭」とある「足東山」とは誰であろう。蘆(野)東山という人が知られるが、すでに安永五年(一七七六)に歿している。この「足東山」については未詳。「御閑絡索」はおひまのついでに詩を詠じてほしいという意であろうか。

以上三篇は、ともに十八世紀後半大坂で学芸交流を行い、寛政期幕府に登用されて、昌平黉を中心とする文教に携わった人々として、短簡ではあるが並べた。おそらくいずれの書簡も、田中元緒が親炙した尾藤二洲から直接入手したもののように思われる。

以上でひとまづ書簡の紹介を終えるが、田中家に蔵される書簡が、たんなる収集ではなく、同家の学芸意識と関わって上方で活躍した学者書簡を収蔵されていることを了解していただければ幸いである。そしてそれが上方学芸の流れを見る上で一定の意味をもつものであればこの上にいうべきことはない。ただ、お恥ずかしいことに、私の貧弱な読解力ではどうにも読み得ない所を残した上、誤読した箇所もあろうかと恐れている。いずれ機を得て、まだ残される十通前後の紹介と合わせ、それらの補正を期したいと思う。

なおこれらの書簡は、未装釘のまま一通一通が生な状態で保管され



ている。また書簡を含む田中家の蔵書・資料の一部は大阪市立大学医学部情報センター医学資料館（あべのメディックス六階）に展示されているので、あわせて御覧願いたい。

末尾ながら、御所蔵書簡の翻刻を快くお許しいただいた田中祐尾氏に心から御礼申し上げます。